愛国と愛教のはざま

渡辺 祐子

富坂キリスト教センター編
原典現代中国キリスト教資料集——プロテスタント教会と中国政府の重要文献 1950-2000

A5判　944頁
新教出版社［12600円］

はじめに

昨年あるキリスト教会で中国とキリスト教の関わりについて話をしたときのことである。質問者の一人が、「今の今まで中国はキリスト教とは最も無縁なところだと思っていた。近代の歴史を顧みても、民衆反乱や軍閥割拠、国共内戦と、どこがキリスト教なのかと思ってしまう」と発言した。恐らくこれが中国に関心のある人々のごく一般的な認識だろう。

関心を持ったとしても、今度は日本語の参考資料が決定的に不足しているという壁に突き当たる。入手できるものといえば、丁光訓の短い説教集や、キリスト教関連誌に時折掲載される中国の教会訪問記のようなエッセイだけで、考えるための材料が見当たらない。手がかりがないから、関心が薄れていく、あるいは極端な場合憶測だけが一人歩きすることになる。中国語の原典の翻訳からなる本資料集の刊行は、こうした状況を打開するための画期的な一歩であり、その恩恵は計り知れないことをまず確認しておきたい。

ただし「キリスト教資料集」の名に惹かれて、中国における一般的な意味での教会の発展の歴史が辿れるのではないかと期待して本書を手にした人（特にキリスト者）は、軽いショックを受けるに違いない。というのも本書に収められている資料は、編者の明確な一貫した方針に基づき「三自愛国運動」と「政教関係」を中心に収集されたものだからである。以下、その内容について思うところを述べてみたい。

三自愛国の歴史

まず五〇〇頁を超える第Ⅰ部には、三自愛国運動の歴史とその意味を考察するための資料が、長短あわせて四七収められている。解放前のものが七つ、解放以後反右派闘争前までが十、それ以外はほとんど改革開放以降の資料で、全体を通して呉耀宗、丁光訓などキリスト教指導者の論考がかなりの部分を占めている。

中国社会のただ中で生きて働いてきたキリスト教自身にとって、解放がキリス

ト教史を画する決定的な意味を持ったことは否定できないが、解放前後の連続性を無視することもまた無謀というものである。キリスト教史の専門家以外の読者が想定されているのであれば、なおさら解放に至るまでのいきさつを大筋でつかむことができる資料が必要である。その意味で、本書が解放以前の資料をいくつか掲載したことは全く理にかなったことであった。ただし、解説の類がないため、一般読者にとっては若干分かりにくいのではないかと思われるところもある。例えば、冒頭に「非キリスト教同盟宣言」と「北京非宗教大同盟宣言」というキリスト教を否定するふたつの資料が登場しているが、そもそもこれはどのような歴史的文脈の中で、誰が何の目的で発表した宣言文であるのか、についての説明がない。また日付も、最初にどこに掲載されたのかを示す典拠もない。資料を丹念に読み進めば、七番目の資料と同資料に訳者の葛谷が付した詳細な注に、その答えがようやく見つかるが、やはり説明不足の印象は免れないのではないだろうか。

これらの宣言が発表された次第は以下の通りである。一八九五年に設立された世界キリスト者学生会議の第十一回世界大会が、一九二二年四月四日から北京清華大学で開催されることになり、その予定を事前の二月に知った上海の学生有志が非基督教学生同盟を結成、三月九日に「非キリスト教同盟宣言」を発表し、さらに北京でも三月十一日に「非宗教大同盟」が結成され、同月二一日に「非宗教大同盟宣言」が発表されたのだった。世界大会は予定通り開催されたが、上海、北京で始まった運動は、広東、湖南始め各地に拡大し、『晨報』『先駆』『覚悟』といった雑誌上に次々にキリスト教を批判する論説が掲載された。これら一連の出来事がいわゆる反キリスト教（非キリスト教）運動である。キリスト教会は反論する一方で、批判の的でもあった外国の影響を克服し、キリスト教の土着化（本色化）を図ろうとした。編者がこのふたつの宣言文を三自愛国運動史の冒頭に掲げたのは、これをきっかけに中国のキリスト教会が本腰を入れ始めた土着化の試みが、「自治」「自伝」「自養」の三自原則に直ちに結びつくと考えたからであろう。

だが、他の資料も示すように、三自原則の基本形は反キリスト教運動が批判する当の外国人宣教師がもたらしたのであった。すでに中国人による教会政治、伝道、財政的自立の重要性を理解していた外国の教会人たちは、反キリスト教運動によって土着化が急務であることをより強く意識するようになる。それは資料6「海外宣教の再考」が示すとおりである。同資料は一八〇七年に始まる中国プロテスタント伝道を功罪両面から分析し、ひとつの総括を行っているもので、本書全体を通して外国の教会人の声を直接聞くことができるのは、この資料のみである。ともすると「外国のキリスト教＝悪、中国のキリスト教＝善」という短絡的な図式が先行してしまいがちな中

にあって、外国の教会人が海外伝道に対する自己省察を行っていたことを明らかにする資料の存在は、資料集のバランスを保ち、冷静な議論を促す上で、さらに近代の宣教師による伝道との連続性を現代中国のキリスト教の中に認める上で、非常に貴重であるといえるだろう。

第Ⅰ部の資料には三自原則の政治性を批判する文献は含まれていないが、すべての論考が一本調子というわけでももちろんない。解放直後に英米海外伝道局に送られた書簡が欧米宣教師の働きに感謝の意さえ表している段階にあったのを経て、一九五四年には呉耀宗によって愛国愛教が掲げられ、「三自愛国運動」の名称が使われ始める。このあたりになると、宣教師が行った宣教事業はことごとく否定されるようになる。改革開放の後、宣教師に対する評価は再び冷静さを取り戻すが、愛国愛教は以前にも増して強調され、三自愛国運動の合言葉として頻繁に提唱されるにいたる。これらの資料に加えて、反右派闘争から改革開放までに至る時期の資料も含まれていれば、五十年代と八十年代以降の議論との違いとの間に、どのような変遷があったのかがより明確になったかもしれないが、しかしこの点は、巻末に付された詳細な年表によってある程度補うことができるものと思われる。

中国政府の宗教政策をめぐって
――愛国愛教とキリスト教会

オリンピック直前のチベットを巡る騒動がまだ記憶に新しい私たちにとって、第Ⅱ部、第Ⅲ部の「中国に宗教迫害はなく、少数民族も信教の自由を十分に享受している」という中国政府の見解をにわかに信ずることは難しい。だが、この程度の理解で総括してしまうには、あまりにもったいない重要資料がここには数多く収められている。その大半は、「信教の自由」が政治的にどのように扱われてきたのか、中国政府は「信教の自由」をどう理解し（いうまでもなく、彼らの理解する信教の自由は、人々が政府に突きつ

中国年鑑 2008

◎好評発売中◎

中国研究所 編・発行

毎日新聞社 発売

1955 年創刊。現代中国に関するあらゆる分野の最新情報、基本情報を提供。

B5 判 約 500 頁

価格：18,900 円（税込）

◆特集

試練にさらされる胡錦濤政権

1.「「和諧社会」建設へ向かう胡錦濤指導部」 金子 秀敏

2.「市場手段と行政関与の間で―新陣容による経済政策」 浜 勝彦

3.「「和諧世界」掲げ大国外交を推進」 塚越 敏彦

4.「安心と信頼の回復を目指す食品安全政策」 森 路未央

◆動向

政治、外交、経済、対外経済、文化、社会

◆要覧・統計

国土と自然、人口、国のしくみ、軍事、少数民族、香港、マカオ、台湾、国民経済、財政、金融、証券、農業、工業、資源・エネルギー、交通運輸、IT 産業、対外経済、知的財産権、労働、暮らし、医療・医学、環境問題、教育、文化、宗教

◆資料

統計公報、主要文献・人事、中国現代史年表ほか

※お問い合わせは中国研究所事務局まで。

（社）中国研究所

東京都文京区大塚 6-22-18

TEL：03-3947-8029

FAX：03-3947-8039

e-mail:c-nenkan@tcn-catv.ne.jp

URL:http://wwwsoc.nii.ac.jp/ica/

ける要求としての権利ではなく、政府が人民に恩恵として付与するものである)、キリスト教を始めとする諸宗教をどう扱おうとしているのか、そして中国のキリスト教会が政府の宗教政策をどのように受け止めているのかを語っている。一般の人間には入手が難しいものも多数含まれていて、それらは特に中国政府の宗教政策、その基本姿勢を知る上で大変貴重なものである。特に第Ⅲ部は、すべての資料の出典が同一であるものの、中国の信教の自由に懐疑的なアメリカの識者、記者を相手に、宗教局長や三自愛国委員会副代表が丁々発止の議論を繰り広げている様子が手に取るように記されていて、大変興味深い。

それではこれらの資料が目指す教会とはいかなるものだろうか。信教の自由が人類史上初めて法的に確立されたのは、アメリカ合衆国憲法に先立つヴァージニア州憲法においてであり、その源をさかのぼれば宗教改革者カルヴァンにたどりつくといえる。この資料集には、カルヴァンの名前が言及されていないわけではないが、それは「信教の自由」とも「教会と国家」とも全く異なる文脈においてである。つまり、資料が説くあるべき教会とは、信教の自由の砦として国家に対峙するそれではない。教会と国家との関係は、外国宣教会と帝国主義との結びつきを批判する議論の中でかろうじて言及されるが、その問題意識が中国における教会と国家の関係に及ぶことはない。中国における両者の関係は、あくまで中国の教会が外国宣教会の影響を脱し、民族の独立と解放にどのように奉仕するかという観点からのみ捉えられるのである。

おわりに

先にも触れたが、巻末の年表は解放以降五十年の歴史を一望のもとに見渡せる労作である。また同じく巻末に付された教会の住所一覧も大変ありがたい。訪中の際、これをコピーして携えていけば、日曜礼拝を守る場所に困ることがなくなるだろう。

ロバート・モリソンが一八〇七年に華人伝道を始めてから、プロテスタント伝道は昨年宣教二百年周年を迎えた。九十年代以降、大陸においてもキリスト教の学術研究は驚くべき勢いで進み、モリソンから民国期にいたるまでの近代キリスト教史研究は、宣教師による伝道事業の再評価を含む優れた論考を次々に生み出している。だがこれはあくまで純粋な学術研究の話である。果たして研究環境の変化が、中国の教会を取り巻く環境にも影響を及ぼすようになるのか、中国の教会が地の塩、世の光としての使命をどこに見出していくのか、隣国に生きる私たちにも無関心ではおれない問題を考える上で、本書が多くの示唆を与えてくれることは間違いない。

(わたなべ・ゆうこ　明治学院大学)

✠